

死は怖くない

編み物の手を休めた。木引退後は、次女夫婦との2人が生い茂る庭を見つめ、柔世帯住宅を鹿兒島市内に構和な表情を見せた。宮崎市の入部アイ子さん(90)は心筋梗塞で急逝した。間も「かあさんの家」で暮らしなく次女の夫も亡くなり、2年が過ぎた。いくつか5年前に長女の愛甲保子さんの死を見てきた。次は自分(69)の住む宮崎市にやっ

の番かとも思うが、心は乱れない。「みんな優しくしてくれませぬ。人生に満足してきますから、何も怖いことはないませぬ」とはありませぬ

◇ 開業医の夫と鹿兒島県高山町(現肝付町)で暮らし、5人の子供を育てた。夫のた「などアイ子さんは不

終末期を見つめて

かあさんの家から

■5■

みんな優しいから



編み物をするアイ子さんに、ゆっくりと時が流れる—宮崎市の「かあさんの家」で、矢頭智剛撮影

安を訴えた。その度に保子さんを思った。夫も白血病など重い病気を患っていた。同時に倒れたら……」04年12月、病院に併設された宮崎市内の老人ホームを見学した。完全個室、シ

ル」だった。アイ子さんは比較的認知症の軽い患者と世間話をし、寝たきりの患者とあいさつを交わす。時間がやさしく過ぎていく。入居後、隣の部屋にいた男女の患者2人が家族に囲まれてく

「親不孝ではなく『子不孝』って言っているんです」とアイ子さん。「早くお父さん(夫)のところにいきたいと思ってもなかなか行けない。その日までここで暮らします」。庭の木に南国の目差しが降り注いでいた。おわり

(この連載は関合俊介が担当しました)